

革命の兵士達が血塗られた

三里塚における第2次土地強制収用の際の闘い

映画 5月28日
PM3:00
3番教室

三里塚の夏
弾丸映画
アルジェの戦い



《革命の兵士達が血塗られた世界を回復するその日まで》 学生会中央執行委員会

60年代一連の階級闘争は大衆の実力闘争を生み出し、同時にその革命的意義の限界性をも提出した。68-69年全国学園闘争を69年秋期安保決戦の敗北こそは、それを生み出した我々に根底的な総括を要求したのだ。かかる敗北を総括しえず「勝利」・「敗北の前進」を云々する諸君達に比して、生みの親たる我々の苦しみなど解ろう筈もないことは明らかである。67年10・8羽田によって日本階級闘争を一步飛躍せしめた我々は、「プロレタリア国際主義」と「組織された暴力」を堅持しつつ二年間の大衆の実力闘争を牽引したのであった。それは革命的労働者・農民の闘いを引き起こし、全国学園闘争を燃え上らせ、70年安保闘争へと接近した。しかし、それは同時に国家の暴力=反革命の強化をも生み出しつつ、権力問題を提起した。

歴史的な未来に対象化されるべきプロ独権力実体=ソビエト建設と、それ迄に至る過程=恒常的武装闘争を我々がいかにかちとっていくのかという内容が問われたのである。一方における現代無政府主義者、他方における社会主義者の発生は、日本階級闘争から召還するものではあっても決して対象変革の推進剤とはなりえない。69年秋期安保決戦は、我々に革命の軍隊建設と、地区共闘（権力闘争時においてソビエトとして機能するそれ）の必然的必要性を現わしつつ、そういったものへの回答を与え切れず、我々は個別撃破されていったのだ。

70年代、それは現代過渡期世界の第二の転回点である。IMF・GATTを防衛しつつ侵略反革命を強化する帝国主義者達の攻撃は、復活した日帝にとっては軍備力の増強に何よりもその焦点が合わせられ、かかる下への革命的翼への攻撃と、

< 2 2 >

世界を回復する その日まで

学生会中央執行委員会

講演 5月29日
PM 1:00
2番教室

久保井拓三 (69年4・28破防法被告
元全学連副委員長)
浅田 光輝 (立正大学教授)
城山 徹 (現代思想研究者)
松原 博志 (学生会中執委員長)



市民社会への帝国主義的社会再編があるのである。日帝の軍事外交路線は、総予算5兆8000億円、72年自衛隊沖繩派兵6400名と、膨大なものである。それは強力な反革命政策を通してしか貫徹しえず、破防法・司法の行政執行権力の下への統合・治安法の成立を法的処理として採りつつ、キャンペーンをもって反革命イデオロギーの形成をなすのである。かかる帝国主義の侵略反革命は、米帝の世界戦略=ニクソン・ゲームドクトリンとも相まってますますその色合いを深め、72年沖繩返還を目指して進んでいるのだ。そういった帝国主義の攻撃は、後進民族解放闘争の展開によって一定程度出鼻をくじかれつつも、未だ容赦なく進展してきている。我々の闘いも又、60年代一連の総括に基づいて、こうした日帝の動向と全面的、且つ鋭く対決するものでなくてはならない。

それこそまさに権力闘争を内包した闘いである。

権力闘争を内包したとは言いつてもなく、プロ独権力樹立へ向けた。それ故、武装蜂起を対象化した闘いであり、ソビエト建設へ向けた闘いである。我々はこれを帝国主義軍隊の解体と、革命の軍隊の建設と、地区共闘の建設として把え返している。こうした組織的闘いこそが、60年代大衆の実力闘争への限界性を突き破る闘いであり、混乱ある反帝統一戦への指針である。

ところで、我が日本階級闘争は、かかる闘いを貫徹する。学生会活動の原則的展開を阻止せんとする諸潮流の敵対の粉碎もその一つである。明大闘争(69年)の敗北は、一年間学生会活動の停止を余儀なくされたが、明大闘争-安保決戦を担った革命的学友の手によってこうして再建された学生会は、こうした学生管理体制=対策委体制に更に対決していこう。日帝の軍事外交路線を粉碎する恒常的武装闘争の地平に立つ!

- 23 -